

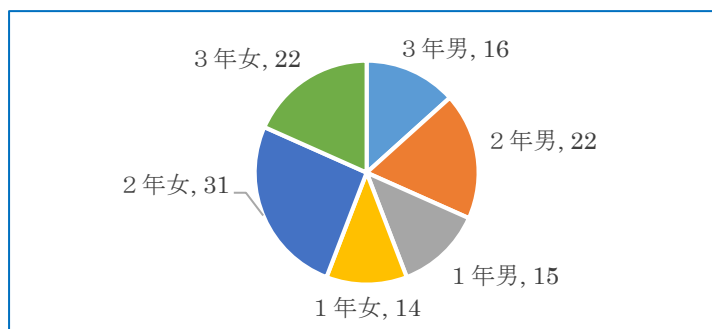
「わたしが、かしこくお医者さんに診てもらおう力を育てる」アンケート調査
秋田県A市内中学校の調査結果について（2016年5月末～6月初実施）

北海道家庭医療学センター「診られる力を育てる」プロジェクト

1 アンケート調査の目的とその方法

今回初めて中学生の調査結果を報告する。秋田県A市のA中学校1校に調査協力をいただいた。同中学校区の中にある2つの小学校にも協力をいただき、低学年及び高学年の調査報告と併せて報告できることは、子どもたちの「診られる力」を育てる上で、小学校1年生から中学3年生まで一貫した成長過程での意識変容を把握することと、限定された地区の地域医療を考える上でも貴重な機会となった。特に医療者にとっては貴重な分析データとして考えていただけるのではないか。この調査目的をご理解いただき、全校上げてご協力をいただいたことに、衷心より厚くお礼申し上げます。

調査は、2016年5月下旬から6月初旬にかけて実施された。A校は1年生男15名・14名、計29名。2年生男22名・女31名、計53名。3年生男16名・女22名、計38名で、全校生120名（男53名、女67名）の中学校である。



各学年の人数のバランスは、2年生女子が全体の4分の1（25.8%）を占め、2学年でも全体の4割強（44.2%）を占める。全体の傾向を見ると、2学年の傾向が全体に影響する。男女比は、男子44.2%、女子55.8%と、女子の方が11.6ポイントも高い。

2 調査内容の分析

(1) 安心できるお医者さんのイメージ

問1では、病院や診療所へ行ったときに、安心できるお医者さんのイメージに近いものを11項目の中から3つ選択してもらった。「図1 学年別安心できるお医者さんのイメージ」のグラフの割合の数値は、四捨五入して表示してある。

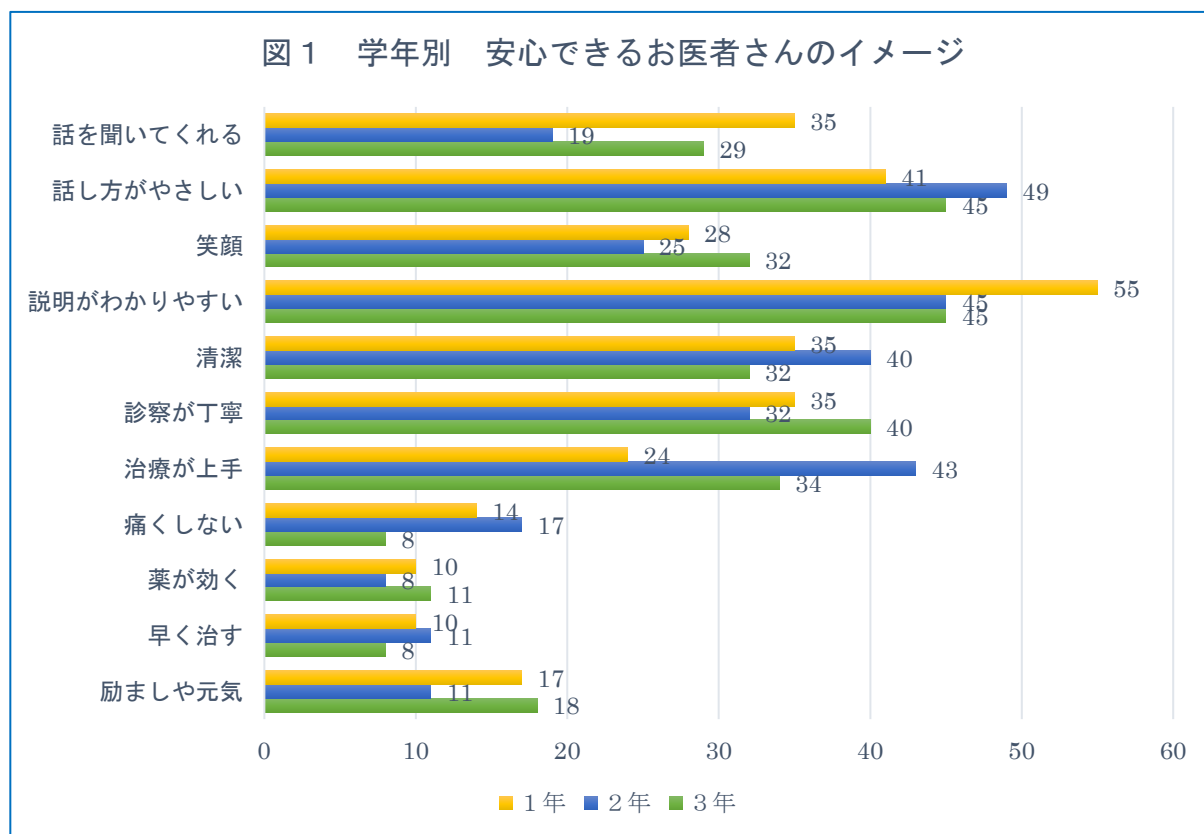
各学年の結果について見ていきたい。

ここで注目するのは、2つの項目が3学年とも高率を示していることである。ともに40%以上を示している一つは、「説明がわかりやすい」が1年55.2%、2年45.3%、3年44.7%、全学では47.5%と半数近い。この数字を押し上げているのは、全学男が54.7%、女が41.8%と男子が12.9ポイントも高いのである。1年男46.7%、2年男59.1%、3年男56.1%と、選択項目のなかでも2、3年男子が選んだ最も高い項目である。ただし、1年女はこの数値より更に高く64.3%を示し、他の項目に比べて突出した数値を示す。

次に「話し方がやさしい」である。1年41.4%、2年49.1%、3年44.7%、全学では、

45.8%を示し、全学男 45.3%、全学女では 46.3%と拮抗している。注目したいのは、1 年男が 53.3%に対し女 28.6%と 24.7 ポイントも差があることである。「話を聞いてくれる」でも、1 年男 46.7%に対し女 21.4%と 25.3 ポイントもの差がある。「話し方がやさしい」に戻して、2 学年では、女 54.8%、男 40.9%と 13.8 ポイントの差で逆に女子の方が高い。3 学年では、男 43.8%、女 45.5%と拮抗している。ただし、同地区の小学 6 年生では 37.8%と、中学生との意識に差異が見られている（当センターホームページ「診られる力を育てる」に掲載されている「秋田県A市内小学校高学年の意識調査について」を参照。以下小学生とのデータの比較の出典は同様とする。）。小学 6 年生は「励ましや元気をくれる」42.2%が最も高く、特に女 54.2%と高率である。しかし、中学生は、15%と 3 分の 1 弱であり、11 項目中 8 番目であり、特に男子は 7.5%と最も低い。ただ、中学 1 年女 28.6%と全体では最も高く、変化は中学 2 年（16.1%）から出てくるようである。顕著なのは、中学 1 年と 2 年男子は 1 名、3 年男子も 2 名という少数であり、男子の 7.5%の内訳である。

中学生は、説明がわかりやすく、話し方がやさしい医師を求める傾向が高い。病状や治療をわかりやすく説明する点については、1 学年女子と 2, 3 年生男子にその傾向が強いことを示す。やさしい話し方では、逆に 1 年男子と 2, 3 年女子にその傾向が強いことを示している。この対比はなぜ起こったのか、性差だけでは判断できない。



1 年生から見ている。最も高いのは、前述した「説明がわかりやすい」55.2%である。女 64.3%、男 46.7%であるが、次に「話し方がやさしい」41.4%では、男 53.3%、女 28.6%と逆転する。「お話を聞いてくれる」「清潔」「診察が丁寧」が 34.5%と同率で続く。し

かし、男女別でみると、大きな意識の差が表れているのである。

「お話を聞いてくれる」は、中学1年男 46.7%に対し女 21.4%であり、他の学年と比べても突出している。小学6年生では 38.1%、女 41.7%と若干女子が高いが、中学になると、男子の割合は8ポイント高いが女子は20ポイントも低くなるのである。女子は、話を聞いてもらうよりも、表情(笑顔 35.7%—小学6年女 16.7%)や丁寧な診察態度(35.7%—小学6年女 20.8%)に関心が向いている。

「清潔」について、小学6年では「清潔」は10%程度であったが、中学では全体でも 35.8%と高く、中学1年男の 46.7%や2年女の 41.9%が全体の数値を押し上げている。対照的に1年女は 21.4%と低い、2年男 36.4%、3年男 25%、女 36.4%と、小学生に比べると15ポイント以上も高い。ましてや、2年生全体では 39.6%と4割近くを占めている。他の項目を押しつけて、「清潔感」を医師にも求めるのは、この年齢の特徴なのか判断はできない。

2年生は、「話し方がやさしい」49.1%と最も高いが、女 54.8%で男 40.9%と14ポイントの差をつけている。逆に「説明がわかりやすい」45.5%では、男 59.1%で女 35.5%と23.6ポイントもの差をつけているのである。順番は1年生と逆転するが、上位2項目は変わらない。「治療が上手」43.4%は、男 54.5%、女 35.5%と、男子が20ポイント近い差を付けているが、全学年でも最も高い数値である。1年は 24.1%で、男女差になると9ポイント男子がリードしているが、3年は 34.2%で5ポイント女子がリードしている。

2年生男子は、やさしい話し方で説明がわかりやすく治療が上手な医師を求めていることが明らかにされた。女子は、「やさしい話し方で清潔」までは明らかであるが、「笑顔」「説明がわかりやすい」「治療が上手」35.5%と少し拡散してしまう。ただ、他の学年と比べて「お話を聞いてくれる」は、1年 34.5%、3年 28.9%に対し、18.9%と低い。

3年生では、「話し方がやさしい」「説明がわかりやすい」44.7%、「診察が丁寧」39.5%、「治療が上手」34.2%と続く。やさしい話し方で、わかりやすく説明をし、丁寧な診察や上手に治療できるという医療行為のプロセスに添って、見事に安心できる医師のイメージを組み立てている。男女別でみると、「話し方がやさしい」は差がない(男 43.8%、女 45.5%)が、「説明がわかりやすい」では、男 56.3%、女 36.4%と20ポイント近く男子が高い。「診察が丁寧」も男 43.8%、女 36.4%と7ポイント男子が高い。女子が高いのは「上手な治療」36.4%で男子よりも5ポイント高いが、「笑顔」「清潔」(36.4%)は、さらに11.4ポイント、女子の方が高くなっている。

全体的にみて、小学生では高かった「励ましや元気をくれる」(42.9%)は、中学では15%と30ポイント近くダウンする。励ましよりも治療に当たる医師の態度や治療方法、そして治療技術に目が向いていくのであろう。

また「痛くない」13.3%では、小学生高学年 37.3% (6年生は 42.2%) に比べると、痛みに対して我慢するといった耐性が出来てきているのではないかと想像される。

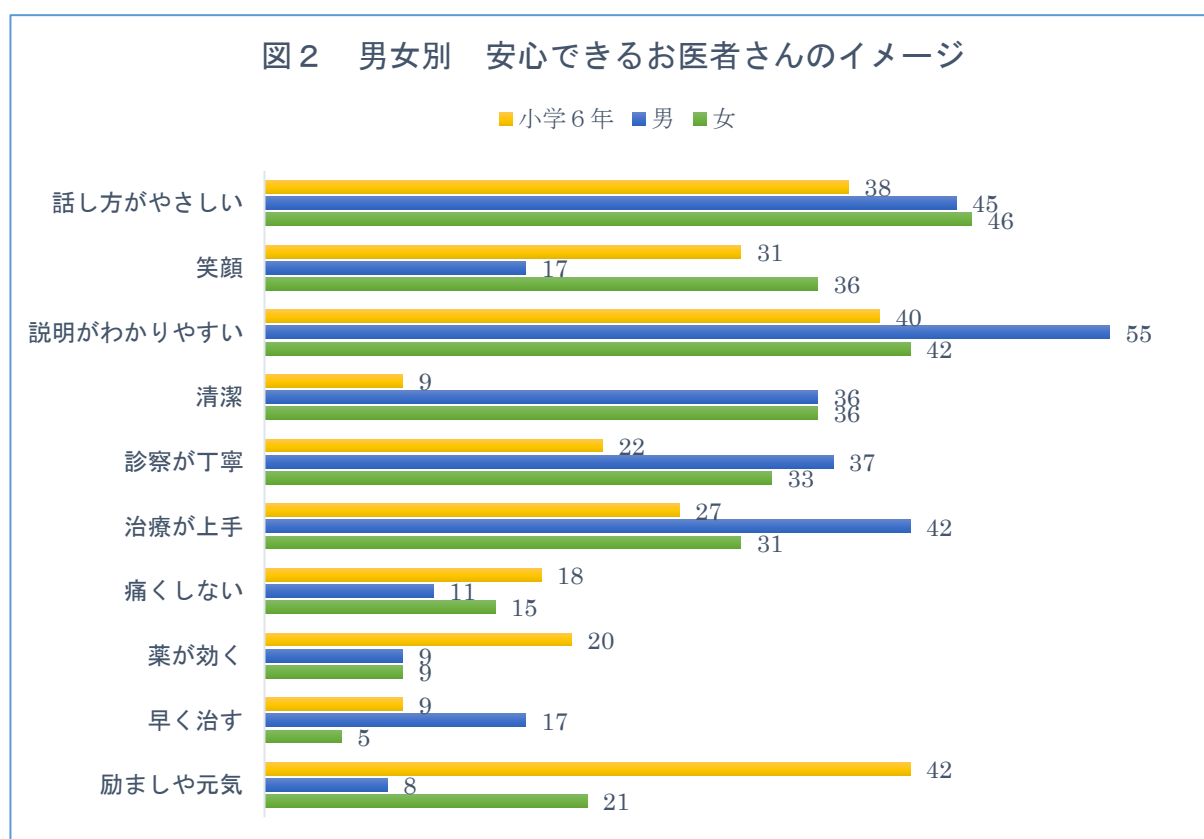
男女の意識の違いについてみてみよう。(「図2男女別安心できるお医者さんのイメージ」)

大きな差異が見られるのは、「笑顔」である。男 17%、女 35.8%と18.8ポイント女子が高い。第一印象として女子には「笑顔」で接することが安心感を与えることになりそうだ。「励ましや元気をくれる」男 7.5%、女 20.9%で、13.4ポイント女子が高い。励ましの効果については、小学生よりも低い数値であるが、女子には多少有効かもしれない。男子が高いの

は、「説明がわかりやすい」54.7%、女子41.8%と共に高い数値ではあるが、12.9ポイントの差があり、この点については中学生には男女問わず、病状や手当てについてわかりやすく説明することが肝心であると考え。

次に「治療が上手」男41.5%、女31.3%と、男子が10.2ポイント高い。どのように治療の仕方を捉えて評価しているのかという課題がある。治療効果は、治療方法や子ども自身の自己管理によって現れることもあり、その際の医師の指示やアドバイスも加味されて解釈されなければならないであろう。

「診察が丁寧」も男37.3%、女32.8%と、男子が4.5ポイント高いが、割合がともに高く、安心できる医師のイメージの文脈になっている項目でもあるので、この差を論じる意味はない。「早く治す」は、割合は低い、男17%、女4.5%と12.5ポイント男子が高い。他の項目には、大きな差異はみられない。



小学6年生との差異を見てもらおう。話し方やわかりやすい説明は、差異があったとしても割合が高いので、傾向に大きな違いはないと考える。清潔感や丁寧な診察、上手な治療は概ね低い。しかし、数値は高くはないが、痛みを緩和することに対して「痛くない」や「薬が効く」には、関心が向く。さらに前述した「励ましや元気をもらおう」は、ダントツに高い数値を示していることから、ここに小学生と中学生に対しての診察や治療の対応や対処の方法の違いを考えてみてはいかがだろうか。もちろん子どもたちに、励ましと元気を与えることは当然である。ないがしろにはできないが、中学生は別の視点から病気やけがを治す治療者としての専門性をシビアに問いかけているのではないかと考える。

(2) 事例「実際の安心できるお医者さんに治してもらっていたときのこと」

問2では、どんなけがや病気で治療を受け、そのときのお医者さんの様子や子どもたちが感じたことを、書き込んでもらった。

全体の4分の3にあたる75.8%、91名（男1年生13名・2年生15名・3年生12名、計40名、女1年生10名・2年生24名・3年生17名、計51名）が、書き込む。男子は75.5%、女子は76.1%と拮抗した割合になっている。

書き込まれた98件の症状（複数の病名を記入した子が6名いるため、実数よりも多い）を分類してみる（「図3症状の分類」）。

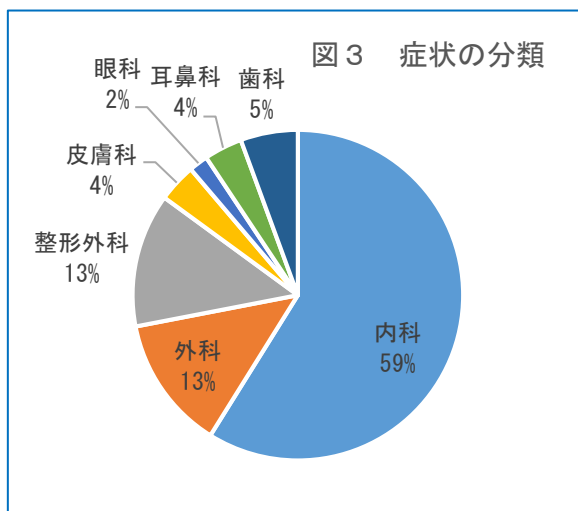
内科系が57件62.6%（男23件、女34件）外科系が13件14.3%（男5件、女8件）、整形外科13件14.3%（男7件、女6件）、皮膚科4件4.4%（男2件、女2件）、眼科2件2.2%（男1件、女1件）、耳鼻科4件4.4%（男2件、女2件）、歯科5件5.5%（男1件、女4件）であった。

内科的な症状としては、風邪（含インフルエンザ）34件、喘息5件、胃腸炎（含腹痛）5件、扁桃腺・喉の痛み4件、発熱3件、頭痛1件、貧血1件、予防注射2件、その他2件、計57件であった。

なぜ安心できる医師と判断したのかを、内科系から見てみよう。

1年生では、風邪で受診した時には、「診察を丁寧にやってくれて、きちんと効く薬をくれた」（男）、「話し方や診察が丁寧だったと感じた」（男）、「注射をし終わった時に励ましや元気をくれた」（男）、「ずっと笑顔でいてくれた」（男）、「すごくやさしくて説明がわかりやすかった」（女）、「常に笑顔でやさしく対応してくれた」（女）、「やさしく説明してくれて、励ましてくれた」（女）。喘息の時には、「苦しい中、励ましながら吸入してくれた」（男）。中耳炎では、「やさしくて説明をしっかりしてくれてあまり痛くしなかった」（男）、「やさしく治療してくれたしやさしく声をかけてくれた」。胃腸炎では、「笑顔で大丈夫だよ、すぐ治るよと言ってくれた」（女）と記す。

2年生では、風邪で受診したときに、「笑顔、やさしい、丁寧」（男）、「先生はとてもスムーズだった」（男）、「丁寧にわかりやすく教えてくれて、薬もすごく効果がよかった」（女）、「親しい感じで話をしてくれる。やさしい感じがするわりとおじいちゃん」（女）、「とても辛くてグデーとしていたら、看護師さんが寝て待っていていいよとやさしく声をかけてくれた。なんだか安心した」（女）、「いまの私の状態をしっかり聞いて理解してくれた。子どもにもいまどうなっているのかをわかりやすく説明してくれた」（女）。発熱では「熱が出て吐いたときに看護師さんなどがやさしくしてくれて安心できた」（女）、「注射をするときに励ましてくれたり、話し方がやさしくて安心したりすることができた」（女）、予防接種を受けるときに「痛かったでしょうとやさしく看護師が声をかけてくれた」（女）、「看護師さんが一瞬で注射を終えてくれた」（女）。喘息の時に「やさしく丁寧に、笑顔で治療してくれた」（男）。



胃腸炎では「対策を教えてくれた。感じたことは、詳しく説明してくれてありがたいと思った」(男)、「お腹が痛いとき吐き気があって、やさしくて診察が丁寧だった」(女)。喉の痛みを訴えた子は「髪の毛がアフロのような感じで、いつも笑っていて、話に私語などを使ってとても馴染みやすかった」(男)と記す。

3年生では、インフルエンザで診てもらった時に「自分の症状を詳しく聞いてくれたし、質問しても一つひとつ答えてくれたし、薬を飲み早く治った」(男)、「話し方がやさしく、話しやすいなと思った」(男)、「風邪かインフルエンザか素早く診察してくれた」(男)、「とてもやさしく笑顔で声をかけてくれてとても安心した。口調がとてもやわらかかった」(女)、「風邪をひいたとき、親だけではなく子どもにもすごくわかりやすい説明をしていると感じた」(女)、「どんな症状かを話したときに、話し終わるまで待ってくれた」(女)。喘息や風邪、イボでかかった生徒は「先生や看護師さんがやさしかったり、アドバイスをくれたり、話をやさしく聞いてくれた」。鼻づまりや喉の痛みでは、「やさしい、馴染みやすい、明るい」(女)、「扁桃腺が腫れて喉が痛かった時、自分の症状を聞き診察が丁寧だった」(女)。

外科的な症状は、足に釘が刺さるケガなど2件、指のケガ3件、手を切る、落下物が当たった打撲、イボ、虫刺され、おでこに歯が刺さる? 火傷、足の痛み、ケガを縫う、各1件である。

足に釘を刺したときには「大丈夫ですかと声をかけてくれた」(1年男)、足をケガしたときには「状態を詳しく教えてくれた。時間をかけて診察してくれた」(2年女)、指をケガしたときには「やさしく対応してくれて良い先生だなと思った」(2年男)、物を落としてケガしたときには「説明がわかりやすく、やさしく話してくれて、治療が上手い」(2年男)、足をけがしたときには「しっかり話を聞いてくれたし具体的に教えてくれた」(3年男)、手を切ったときには「その時は痛くて泣いていたけれど、大丈夫だよと言ってくれて、少し落ち着くことができた」(2年女)、虫刺されでは、「話を聞き入れ、体験したことを話してくれた」(2年女)。おでこに歯が刺さったり頭に窓の角を刺した生徒は「ずっと笑顔で、大丈夫、大丈夫と言ってくれた、ちょっと痛かったけれど、よく我慢したなと声をかけてくれた」(2年女)、おでこになぜ歯が刺さったのか想像がつかない。太股に火傷をしたときには「大丈夫などと声をかけながら包帯を巻いてくれて、嬉しくてとても落ち着いた」(2年女)と記す。

整形外科的な症状としては、腰痛3件、捻挫2件で、骨折、首の骨のズレ、足の痛み、突き指、脱臼、ジャンプ膝痛、筋伸び、各1件であった。

部活動などでの故障で治療を受ける際の実態が見えてくる。小学生とは全く違う。成長期の発達途上における運動でのケガは、学校では予防できる指導体制づくりも必要であり、医療サイドからの助言も不可欠といえよう。重要な連携のポイントである。

「足の捻挫の時、どこが痛いのか、どのように痛いのかを聞いてくれた」(1年男)、首の骨がずれたとき「どうすれば治るかを教えてくれた」(1年女)、脱臼では「常に気にかけてくれる。雰囲気やさしそう」(2年女)、ジャンプ膝痛では「とてもやさしくアドバイスなどをくれた」(2年女)、足をケガした腰痛では「改善の仕方などを教えてくれた」(3年男)、筋伸びでは「やさしく接してくれてすぐに治って安心した」(3年男)と記す。

皮膚科的な症状としては、アレルギー2件、蕁麻疹、アトピー、各1件である。

アレルギーでは「先生の顔がニコニコしていた」（1年男）「笑顔でわかりやすく説明してくれた、痛くならないようにしてくれた」（2年男）、蕁麻疹では「やさしい感じがした」（1年女）、アトピーでは「笑顔で診察してくれた」（1年女）と記す。

耳鼻科は、中耳炎2件、副鼻腔炎1件、鼻づまり1件である。中耳炎では「やさしくて説明をしっかりとしてくれてあまり痛くしなかった」（1年男）、「やさしく治療してくれたし、やさしく声をかけてくれた」（1年男）。副鼻腔炎では「笑顔で接してくれたのと、もらった薬がかなり効いた」（1年女）と記す。

眼科は2件、斜視で検査を受けたときに「どの検査の際も、やさしく診てくれた」（3年男）、ブドウ膜炎では「完治には至っていないが、尽力してくれて、言い方はきつかったが腕は上手かった」（3年女）と記す。

歯科は5件、多くは虫歯の治療であり、書き込みは全て3年生である。「痛いのを言ったらすぐ聞いてくれた」（男）「わかりやすく教えてくれた」「やる前に必ず痛かったら言ってねとか、大丈夫などの声をかけながら治療され、安心した」「話しかけながら治療してくれた」、以上、女子が記す。

安心感を抱かすのは、「やさしく話を聞く、わかりやすく説明する」のが基本であるとすれば、それが医療者として“当たり前”にしてほしいという願いがここには込められているのではないだろうか。病気やケガと向き合う中学生たちに、どうしたらいいのかと様々なアドバイスができて、それを理解できるのが中学生である。自分の身体を自己管理するためのスキルアップが期待される重要な時期でもある。

(3) 事例「もう行きたくないと思った病院や診療所に行ったこと」

問3では、もう行きたくないと思った病院や診療所に行ったことで、どんなけがや病気で治療を受け、そのときのお医者さんの様子や子どもたちが感じたことを、書き込んでもらった。

男6名、女20名、計26名（21.7%）の子どもたちが記した。1・2年は男子ゼロ、3年男子が6名である。女子は1年2名、2年7名、3年11名と学年が上がると増えている。

1年女子は、「高熱をだしたときに、ただ熱が高いだけとか、頭が痛いだけとかで、診察を終えてしまった先生。薬も合わず逆に悪化してしまった」では、もう行きたくはない。鎖骨骨折した子は「笑顔がない」とびしゃりと切る。

2年女子は、「風邪で行ったときに、差別された、痛い、笑顔がない、説明不足」と記すが、どんな差別なのかは不明。「脱臼で1回目に行ったときには湿布をもらったが、そのあとずっと治らなくて、もう一度行ってみたら病院を紹介された。もう少ししっかり話を聞いてほしい」と不信感を植え付けられた子は、紹介された病院で、安心できる医師と出会って、前述の「脱臼」の際の記述になっている。医師との相性が合うとか合わないというのは「弁解」であり、まずは適切な診断が求められる。発熱では、「少し雑だった。ピリピリしていた」「無愛想で少し怖かった」、「インフルエンザで、先生が親に嫌味のようなことを言ってきた」と、診察時の医師の様子を伺っているのである。「出された薬が効かない」「自分の話など何も聞かずに診察して、自分の症状には合っていない薬を出された」では、その後その病院や医師と会うことがなければ、どのような診断で処方したのかを、医師が確かめる手立て

を失い、診断の適否に気づきにくくなる。不適切な点が指摘されない限り、悪しき連鎖が続くことになる。改善は難しいが、そこが最も注目されなければならないところでもある。

3年でも同様に指摘されている。「魚の目で何回も病院に通ったけれど、治らなかった。他の病院に替えたなら完全に治って前の病院に行かなければよかった」(女)と記し、「足の親指が化膿して、何日も同じ治療の繰り返しで、何か違う方法で治してほしかった」(男)と治療を替えることで完治したことを受けて批判する。

医師に求める清潔感は、病院の内の環境にも当然目が向く。「掃除が行き届いていない。トイレが汚い。個室がとにかく狭い。待ち時間が長い。ご飯が少ない」(男)と入院時の体験を語る。肉離れで診察を受け「話し方が怖くて、話を聞いてくれない」(女)や虫歯の治療で「言い方が他の歯科院よりもとげとげしく、笑顔があまりなくてちょっと居づらかった」(女)「さっさと要点を言ってくれない。すごく痛かった」(女)と、痛さが倍になるような思いを記す。また、「肺炎で行ったところ、診てもいないのに肺炎ではないですねと言った」(女)という誤診の疑いや、風邪でいったところ「治療について自信を持っていないような話をしている」(女)のを聞かされる患者は、身の置き所がない。中学生には、医師としての是非について、すでに判断基準が備わってきていると踏まえておくべきではないか。

(4) 事例「どんな病院・診療所やお医者さんがいたらいいか」

問4では問1とも重複する部分でもあるが、中学生が考える理想の病院・診療所、そして医師をイメージしてもらった。108名(90%)が書き込んでいる。男46名86.8%、女62名92.5%であった。特に2年女は、31名中無記入は1名だけであった。

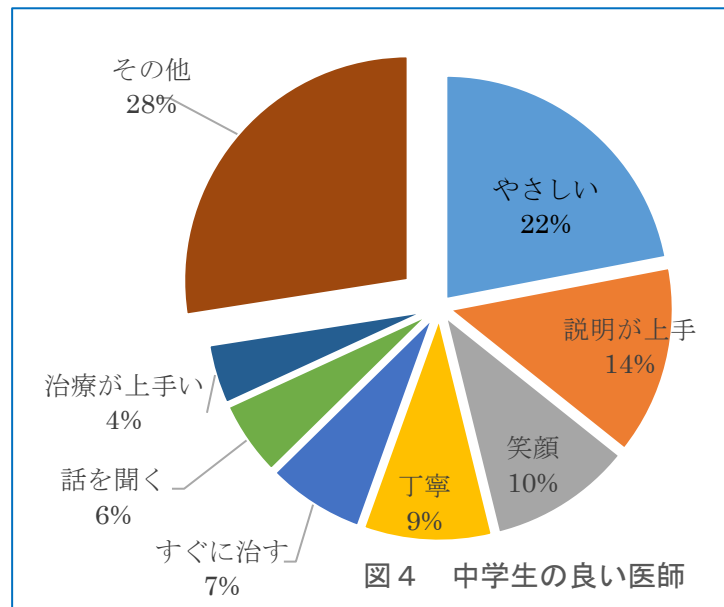
先に病院・診療所について、男13件、女15件、計28件(記入件数108を母数とした割合は25.9%)と4分の1が書き込む。意見を紹介しよう。

「治療が上手な病院」(1年男)、「しっかりとした医療設備がある病院」(1年男・女、2年男)、「なるべく早く治る病院」(2年男)、「やさしくて安心させてくれる病院」(2年男)。「清潔で隅々まできれいな病院」(2年男)と清潔について9名が指摘している。「そんなに遠くない範囲で、あんまり老朽化していない病院」(2年男)「すぐに対応してくれて家に近い病院」(3年女)、初診後通院する場合、遠方だといろいろと支障が出る。交通アクセスが不十分な場合、誰かに送迎してもらわなければならない。移動手段のない子には、苦痛であろう。老朽化に関しては「明るい場所で診察してくれる病院」(3年女)は、病院であるだけに明るい環境を求めるのである。「隣のN医院」(2年男)「市立病院」(3年男)「T診療所、T皮膚科、K小児科など」(3年女)「K小児科」(3年女)と具体的な医療機関名をあげる。「待ち時間が短い病院」(3年男)「すぐ診察の終わる病院で待ち時間10分以下」(3年男)と条件を提示する。インフォームドコンセントが医師に求められていることもあり、患者によっては時間を要する場合、その分待ち時間は長くなる。子ども自身も医師に病状について聞き取りや説明を求めていることと関連づけると、診察待ちの人の数にもよるが、10分以下の待ち時間は難しいであろう。それでも具合の悪いときに待合室の椅子に座って待つのは辛い。冷暖房の設備が十分整っていない病院や医院が敬遠される理由であろう。

「土日祝日もやっている病院」(1年・2年女)。救急医療体制がしっかりと整備されることの要求でもある。

医師についての書き込みは、男40件、女56件、計96件（記入件数108を母数とした割合は88.9%）である。キーワードの総数は182であり、「図4中学生の良い医者」の割合の積算根拠である。

キーワードでまとめると、「やさしい」が男女とも多く男13件、女27件、計40件（22%）であるが、小学生と比べると半減している。ここでは「やさしい態度や話し方、親しみやすい」も含む。次に「説明が上手」で男10件（男子の4分の1）、女15件、計25件（14%）で「わかりやすく、詳しく、おもしろく」も含む。ここは、小学生との違いを如実に語っている。早く治すためにも病状に対して、きちんと受け止め理解することであると認識しているのである。



「笑顔」は19件(10%)であるが、女子が17件と女子の56件の内30%強を占めている。全体の2番目に多かった。「丁寧」17件9%では、女子の件数が男子より5件多いが、「すぐに治す」13件7%では、男子の方が女子より5件多くなる。「話を聞く」10件6%は、女子が7件と多い。治療が上手は8件4%である。女子がやさしく笑顔で丁寧に、わかりやすく説明してくれる医師を求めていることが見えてくる。

また、「その他」の割合が、小学生14%と比べて、28%と倍になっているが、医師に求める要求が多様化していることを如実に示していた。

「的確な診断」「自分の身に添う」「病気への幅広い知見」「丁寧な回答」「気配り」「患者にあった言葉遣い」、そして「老人にもわかる説明」と、若い世代よりも理解が難しくなってくる高齢者への配慮や、「医師がその仕事にやりがい感」を持っているかどうか、厳しく問いかけている。

このキーワードを記入した108人で、件数を割り返してみると、「やさしい」が37%を占める。小学生高学年65.4%と比べると、30ポイント近く低い。（次頁図「中学生108人で割り返した割合」と「小学生107人で割り返した割合」を参照）

また、「わかりやすい説明」を求めている点では、23%と小学生8.4%の3倍近い割合を示す。「笑顔」は、小学生も16.8%とあまり変わらない。「早く治す」も12%と同数である。

「話を聞く」は小学生15%で2番目に高い数値であったが、中学生は9.3%と1割に満たない。診察や治療に中学生は「丁寧さ」（15.7%）を求めるが、「痛くしない」（13.1%）や「励ましや元気」（11.2%）を小学生は求めている。

中学生の声を拾ってみよう。

「僕のことを考えてくれるお医者さん」（1年男）、「診察が丁寧で、相手のことをきちんと思ってくれている医者」（2年男）、「できるだけ自分に寄り添ってケガなどを診てくれる方」

(3年女)、「親身になってくれる人」(3年女)と、医師の患者への寄り添い方を示唆する。

「幅広い病気を診てくれる人」(2年男)は、まさに家庭医が地域でその存在感を増さねばならないことを意味するのではないか。

「全力で何でも治療できるお医者さん」

(3年男)、「スピーディーにかつ確実に効果のある治療をしてくれる医者」なら申し分ない。「細かいところまで気を配ってくれる」

(1年女)、「患者の年にあった言葉遣いをしてくれる」(1年女)、「患者さんに笑顔で接して、やさしく話を聞いてくれて、自分の仕事にやりがいを感じているお医者さん」(2

年女)、「笑顔で身なりを整えて清潔にしている人。わかりやすく教えてくれて、適当に薬を処方しない人」(2年女)。このような指摘は、不快な体験が過去あったことを想像させる。

「I内科の先生のような人。若い人より年の大分いった方の方が何となく安心できる」(2年女)、「説明が丁寧でわかりやすい。親しみのある話し方をする。説明が面白い」(2年女)とベテランの味を感じているのかもしれない。

「子どもや高齢者を差別しない」(2年女)と手厳しい。「病気やケガだけではなく、精神的に元気になれるやさしいお医者さん」(3年女)、「背中をさすってくれて元気をもらえ」(1年女)は、“病は気から”を予防するためにも、励ましや元気を与えることの精神的効果はまさにこのことである。

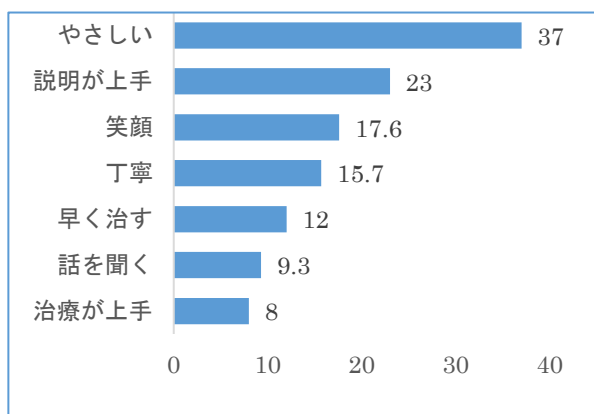
「いろいろな可能性から病気の診断をしてくれる人。老人にもわかるようにしっかりと説明してくれる人。話をしっかりと聞いてくれて、丁寧に答えてくれる人」(2年男)は、的確かつ重要な指摘である。特に子どもの質問に丁寧に応えることは、相互のコミュニケーションを成立させることに他ならない。

3 分析を終えて

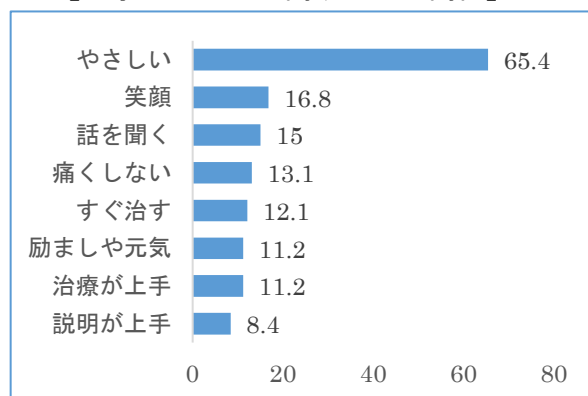
中学生は、病院・診療所、そして医師や医療従事者に対して、自己の経験値からこうしてほしい、こうあってほしいという願いや欲求を、様々な見地から持っていることが、明らかにされた。自分の病気やケガの状態を理解し、治療の方法やその後の自己管理についても、「早く治す」ためにどうしたらよいかを強く求めている。そのときの医師の態度が、患者その人に添うかどうかが、安心度と信頼性を高めるカギになることを指摘している。

特に、個人的な経験の問題だけではない。高齢者の受診の様子についても触れ、話し方にも注文をつける。心憎い配慮である。それは、そういう場に居合わせた中で違和感を抱いたことに一因するのであろうか。彼らの周りへの注意深い観察力を過小評価してはならない。

【中学生 108 人で割り返した割合】



【小学生 107 人で割り返した割合】



どのような医療環境や医療設備が患者の不安を解消するのか、また医師が患者とどう向き合うのか、核心をついた多くの示唆を与えてくれている。

慢性疾患ではない限り、急性疾患の場合の患者の多くは、医療機関とのつながりも完治すればそこで切れる。そういうパートナーの関係でありたいと願うところに、双方の目的は合致する。だから、その機会に出会った医師への信頼性が、その後の受診態度を形成していくことになる考えると、最初の出会いが、その後の人間関係を左右するであろう。そう考えたら、その時の人的・物的な受診環境は、よりよい出会いを創り、その後の関係を維持するために重要な条件となろう。

喘息で通院した中学1年の女生徒は、安心できる医師として「まだ小学校2～3年生の時だったので、簡単に説明してくれた。少ない説明でも的確に診断してくれた」と4～5年前もの診察の様子を鮮明に覚えている。子どもの頃の大きな疾患であれば、その時の痛みや苦しきは覚えているかも知れないが、この子のような過去の医師の姿が心に焼き付き、理想の医師の姿として「患者の年齢にあった言葉遣いをしてくれる」と、その時の体験を踏まえて意見を述べていることに注目してもらいたい。

彼らは、決して難しいことを要求しているのではない。求めるところの医師の姿から、医師と共に疾病と向き合い、一日も早い治癒のための自分自身との闘いも、もう理解し自覚できるのが、中学生という年代である。

「診られる力」の大事な要素に、「自身の疾病を正しく理解し、早く治癒させるために自己管理する力」が、その一つであることに気づかされた。

最後に、多くの示唆に富んだ提案をしていただき、アンケート調査に協力していただいた中学生諸君に改めて厚く感謝いたします。